

支 部 活 動

九州支部

□第18回

日本肺癌学会九州支部会

昭和55年6月27日(金)

宮崎県医師会館

当番幹事 香月武人

(宮崎医大第1外科)

特別講演 「肺癌治療の問題点について」

宮崎医科大学第2外科

富田正雄

肺癌症例のうち、外科的治療の対象となる症例ではStage IIIの症例が圧倒的に多く、最近では70才以上の高齢者も多くなっている。これら症例を中心に外科的治療の問題点についてのべた。

1) T₃によるStage III症例では拡大手術により根治性を高めることが可能であるが、その限界は上大静脈浸潤例、横隔膜筋層におよぶ浸潤例、胸膜結節状浸潤を除く症例などがあげられるが、肺動脈壁浸潤・気管分岐部におよぶ症例、心膜浸潤例および胸膜結節状浸潤例などでは拡大手術により、少数例ではあるが長期生存例を期待することができる。

2) N₂によるStage III症例に対する縦隔郭清によるdenervationの影響と肺合併症発生因子および免疫学的にみたリンパ節の抗原性について実験的に検討した結果についてのべ、腫瘍が急速に増大する以前に縦隔リンパ節を郭清する必要があることを免

疫学的見地から強調した。

3) 高齢者に対する外科的治療の成績を向上させるためにlimited resectionの意義および術後肺合併症防止のための肺表面活性の変動についてもべた。

4) 肺癌に対しては遠隔転移を防止するためにも組織型別のよりよい化学療法との併用が必要であることも併せてのべた。

1. 肺癌における術前肺血管造影の意義・問題点

福岡大学第二外科

白日高歩, 田中英徳

九州大学第二外科 吉田猛朗

最近実施した48例の肺動静脈造影(術前)で次の結論を得た。

1) 肺動静脈造影を実施した症例のうち、36例が異常像を示したが、その78%が中樞型肺癌で扁平上皮癌が半数を占め、T₂, T₃, N₂症例が多かった。2) 区域動脈相迄に異常がみられる例の多くは全切または審査開胸となったが、それらの中でも扁平上皮癌は比較的、根治、準治癒手術の対象となった。

2. 肺癌におけるCTの有用性

長崎大学放射線科

中島彰久, 福田俊夫

林 邦昭, 本保善一郎

佐世保市立病院放射線科

前田 徹, 長崎県二

肺癌でのCTの応用を検討し、①縦隔や胸膜への転移・進展、②胸水や心嚢水の貯溜、③肺と縦隔や胸膜病変との鑑別、等に有用であったものの、④腫瘍と

それに接する無気肺や胸膜病変との区別が困難との結論を得た。

3. 癌性胸膜炎胸水細胞の酵素組織化学的検討

自衛隊熊本地区病院内科

西川 博

熊本大学第一内科 樋口定信

島津和泰, 杉本峯晴, 福田安嗣

安藤正幸, 徳臣晴比古

胸水48例につき、その液性成分、細胞分類細胞活性について、主に癌性、結核性に関して検討した。液性成分については差はなかったが、mgのNBT還元試験では結核性で高値を示し、癌では低値を示すものが多く、その鑑別には有用であった。

4. 肺のcoin lesionの診断

久留米大学第一外科

八塚宏太, 西村 寛, 井星昭彦

枝国信三, 福島 駿, 武岡有旭

武田仁良, 掛川暉夫

肺癌の疑われるcoin lesion 30例につき擦過細胞診を行った成績を報告した。30例中2例の小細胞癌を除く28例に手術を行った。このうち24例が術後の病理診断で悪性腫瘍と診断されたが、細胞診では30例中23例に悪性所見を認め、病理診断に対する正診率は95.8%であった。細胞診による組織型推定の正診率は76.1%であった。30例中4例は良性疾患であったが、その内訳は、結核2例、過誤腫1例、肉芽腫1例であった。

5. 切除肺癌127例の検討

国立療養所南九州病院